

周恩來の誤算

——顧順章事件の真相——

松本英紀

目次

I 顧順章の「叛變」

- 1 つくられた事件——黨史から見た顧順章事件
 - 2 波紋 i ——總書記の逮捕
 - 3 波紋 ii ——ノウレンス事件
 - 4 波紋 iii ——伍豪啓事事件（以上本號）
 - 5 伍豪啓事事件の背景——周恩來と顧順章
- 2 顧順章事件の真相
 - 1 顧順章の逮捕
 - 2 董健吾「脱險」記
 - 3 誰が顧の叛變を知らせたか
 - 4 周恩來・張冲・潘漢年

I 顧順章の「叛變」

1 つくられた事件——黨史から見た顧順章事件

一九三一年四月二四日、漢口の大通りで中共中央の大物が國民黨の武漢駐在の特務に逮捕されるという事件が起こった。逮捕されたのは、周恩來のお氣に入りの助手で、中共の特務工作の権限を掌握していた顧順

章であった。逮捕された人物が特務機關の大物であったから、國共兩黨に大きな波紋を廣げた。中共中央はこの年の一月に開催した第六屆全國代表大會第四期中央全體會議（以下、六大四中全會というふうに略す）で決定した方針で各地の根據地（ソビエト區、邊區）へ黨中央の有力者を派遣することにした。鄂豫皖ソ區（湖北・河南・安徽の省境にある根據地）へは中共の老幹部、張國燾と王明派の陳昌浩が行くことになった。彼らの途次の護衛には、周恩來の命令で中央と各地の連絡網を管理していた顧順章が任務を負うことになった。顧順章が逮捕されたのは、張國燾らをソ區に見送った後であった。王明路線の推進者で、總書記向忠發の後見人として中央の権限を握っていた周恩來は、忠實な部下の顧順章が逮捕された情報を得ると、ただちに配下の特科（中共中央の保衛機關、いわゆる情報部）を動員して、すばやく黨中央の機關と指導者の住まいを移轉する措置をとった。周恩來がこのような機敏な措置を取り得たのは、國民黨の特務本部に潜り込ませていた特科の錢壯飛がいち早く周恩來に情報を傳えて來たからであった。四月二六日、顧順章が先導して國民黨の特務機關——中央組織部調査科總幹事の張冲、黨派遣組組長（黨事件處理擔當總幹事）の顧建中らの大捜査隊が上海に乗り込んできて、捜索を行なったとき、すでに中共中央の機關や人員の行方は跡形もなく消えていた。こうして顧順章の叛變によって潰滅の危機に陥った黨組織は「隱蔽戰線總帥」周恩來の「驚心動魄的鬭爭」^①によって救われた。



唯一残っている顧順章の肖像、後列中央の帽子を被った人物

中共の黨史では、この事件は上海の流氓出身の野心家がたくみに黨内に潜り込んで引き起こした單なる叛變事件であると説明する。そのため、周恩來の生涯の政治行動は黨の路線に一貫して忠實であつたと説く見解では、顧順章の人格と道徳の劣悪さのみが強調されて、事件發生の原因を個人的な問題に歸結して、事件の政治的な重大さをことさら消極的にとらえようとした。

顧順章の「叛變」事件はほんとうに單なる野心家の起こした事件であつたのだろうか。だが、顧順章事件の後にも個人的な資質の問題では説

明できない事件がつぎつぎと連鎖的に發生するのである。これらの一連の事件はじつさい顧順章事件と密接な關連のもとに起こつたものであつた。とりわけ、周恩來の名を冠した「伍豪啓事」事件は、ずっと後年まで周恩來の政治命運を左右する深刻な問題となつた。顧順章「叛變」事件の背景にはいつたい何があつたのであろうか。周恩來は事件とまつた関係がなかつたの

であろうか。

本稿は、顧順章の「叛變」事件は、四中全會の方針にもとづく肅清計畫の一端であり、周恩來によつて巧妙に仕組まれた偽裝事件であつたのではないかと推測し、顧順章事件をもういちど検討することによつてこの假説を證明しようと試みるものである。

2 波紋 i — 總書記の逮捕

六月に入つて、中共總書記の向忠發が國民黨の特務に逮捕され、即座に處刑される事件が起こつた。向忠發は六大でスターリンの一聲で黨總書記に就任して以來、李立三、王明政權に協力したが、船員上がりの無教養な労働者と輕視され、實質的な權限は李立三や周恩來に握られた。周恩來は四中全會後、まるで部下の如く向忠發を扱い、顧順章事件が起こると、眞先に中央ソ區へ送り込もうとした。特科の工作員の陳養山は、この頃の向忠發の生活をこう語つた。「向忠發は四中全會後にも名義上はなお總書記であつたが、實際にはなんの工作もすることはなく、いつも家でぶらぶらしていた。彼はこの時、すでに墮落していて、一日中、酒を飲んで遊び呆け、女といちやついていた。」^④その間、周恩來は向忠發の行動を制限し、周夫婦の家に同居させてソ區への出發に備えていた。向忠發は愛人（藝妓の楊秀貞、顧順章が紹介したという）會いたさに周の家をこっそり抜け出し、旅館に住む愛人のもとに駆けつけた。周恩來は愛人の傍にずっと監視人をつけていた。この監視人は任弼時の妻の陳琮英で、彼女は「當時、黨組織が私に與えた任務は、この女の行動に注意することであつた」と語っている。^⑤

周恩來はなぜ向忠發の行動をいちいち監視していたのであろうか。なぜ愛人を監視させたのであろうか。向忠發が逮捕されると、周は特科の

潘漢年に事實かどうか確かめさせた。潘漢年は顧順章事件後、あらたに改編した特科に加わった人物で、これ以前にも楊度と連絡を取りながら杜月笙から情報を得るなど情報工作の経験があった。人脈からいえば、潘漢年は李立三の部下で、李立三路線のもとで文化面の統一戦線工作をすすめる、魯迅を共産黨陣營に取り込んで中國左翼作家連盟を成立させた。顧順章事件後に改編された特科では、陳雲、康生に代わって實質的な責任者となる。潘漢年はこのときの因縁で周恩来に人生の後半を牢獄で送る辛酸を嘗めさせられた。この時期の周恩来の「反黨」行為の秘密を知り盡くしていたからに違いない。

周恩来は忽然と姿を消した向忠發が思惑どおり逮捕されたかどうか確かめたかったのであろう。それを王明と氣脈を通じる陳雲、康生でなく潘漢年に探らせた。向忠發が逮捕された後、黨内では叛變したかどうかが話題になり、向忠發と連座して逮捕されていた陳琮英はたしかに向忠發は叛變していたと證言した。

このような周恩来の行動はいったい何を意味しているのであろうか。以下のような事件の背景が推測される。すなわち、周恩来は早くから向忠發を國民黨に賣り渡そうとしていた。向忠發はそれをうすうす感づいて周の家から脱出した。周恩来はあわてて向忠發の行方を探した。運良く向忠發は逮捕されていた。陳琮英の任務は周恩来と國民黨、おそらく特務との取り引きが成立する間、向忠發を看視することにあつた。すべてを氣づいた向忠發は逮捕されるとすぐに黨の秘密を自供して國民黨に寝返った。しかし、取り引きどおり、三日後に銃殺された。

向忠發の逮捕事件は、黨史がいうように、顧順章と同様の出身階級の低い船員上りの労働者が起こした事件というような單純なものではなかつたのである。この事件は顧順章事件と複雑に関連していた。ここで向忠發を捉えた側の證言を聞いて見よう。

●共黨首領

向忠發昨日被捕

▲警備部派員引脱
遠東社云、向忠發共黨首領、於昨日(二十二)上午九時三刻、在法租界望平街被捕、當送崑山路捕房、旋即由京河捕房政治部、由警備司令部、以該犯爲共黨首領、刻已派員引脱、

伝える 20、6、23 民國
速捕の事 総書記の申報

顧順章を逮捕した武漢偵緝處の蔡孟堅は、後年、三十七、八年の頃、武漢で陳獨秀、張國燾と往事を回想し、顧順章に話しが及んだ際、彼の中共黨内における重要性を語り、續けて次のようなことを話した。

「民二十年(一九三二年)のことを

振り返つて見ると、毛澤東は江西の根據地に盤據して、上海租界の全國ソビエト主席、向忠發が在滬の中共政治局に挾制されるのを願わず、命令を出して、ソ區の軍事行動を一同に牽制を受けるようにさせた。そこで、この向忠發が計畫した、武漢および湘鄂路をへて井崗山に潜入して中央組織を建設することを建議した。同時に中共中央はモスクワから上海に歸つて来たばかりの張國燾に武漢をへて豫鄂皖邊區に潜入して軍區主席に就任させることを決定した。彼らは武漢が「白色テロ」の地區であり、必ず幹部を武漢に派遣して秘密裏に連絡掩護の任務を按排しなければならぬと考えた。だから、顧は自ら勇を奮つてひそかに武漢に行くことを告げた(原文の表現を若干改めた。以下、蔡孟堅の文章を引用するときは同じ)。

向忠發がこの時期、井崗山に行くという計畫は、國民黨では早くから情報をつかんでいた。『中國現代史辭典——人物部分』に顧順章の項目を書いた王章陵は、根據を明らかにしていないが、このような興味深い記事を書いている。「(顧順章は)、二十年(一九三二年)四月、上海から江西ソ區に至り、黄金を攜帶して上海に歸る途中、武漢をへた時、江湖の魔術師に扮して、江湖藝人の身分で旅社に宿泊した。その任務は張國燾を護衛して漢口から黃安七里坪に赴くことであり、また中共中央主席向忠發が上海から武漢に行き、粵漢路をへて井崗山に行く沿途の護衛にあ

で引用する穆欣の記述はあきらかに黨史に整合させるため後から整理した文章であるが、しかし、その文脈からも陳養山と黃凱との間に取引引きがあったことを窺わせる。黃凱は何度かの訊問中に、ノウレンス事件についても自供を迫られ、ノウレンスはほとんど我らとは關係なく、公共租界當局がむりやりわれわれに身柄を引き渡してきたので、國民黨が事件を摘発したのだと思つたと告げた^⑤。この發言も後から作られた話で、宋慶齡らの中國民權保障同盟がさかんにノウレンス夫婦は帝國主義の陰謀によつて逮捕されたと宣傳したのと同じように、すべて國民黨の所為にし、中共はノウレンスとは關係がないことを強調した。だが、ノウレンスのスパイ行動はすぐに白日のもとに晒された。國民黨中央の組織、宣傳兩部と外交部が押収した文書を整理して各新聞に連日にわたつて公表したのである^⑥。周恩來ら黨中央がノウレンスの逮捕で動搖しないはずはなかつた。コミンテルン東方部とは周恩來が連絡をとつており、コミンテルンからの資金援助が滞ることは、地下に潜っている黨組織にとっては死活問題であつた^⑦。

しかし、黨中央は事件に對して沈黙を守り、影を潜めてじつと事態の成り行きを見守つた。出来ることといえば、特料の活動にたよるしかなかつたが、しかし、改編された特料には潘漢年しか動かせる者はいなかつた。特料の責任者となつていた陳雲は勞働問題に傾注し、兼任していた中華全國總工會團書記に専從した。もう一人の康生は顧順章一家の殺害にかかわつていたので早々に身を隠していた^⑧。ひとり救済活動の責任を負つた潘漢年は、ノウレンスの親筆の手紙を手に入れたように、手廣く延ばした情報網を活用した大膽な方法を考案した。中共中央が上海から轉出することを公表し、當局の目を中共から反らせて救済運動を掩護するという計略であつた。これは中共がよく採る特務工作の方法であつた。おそらく、潘漢年は國民黨の關係者と連絡をとつて、中共中央の個

人の名前を用いて集團で黨を離脱したという聲明を出すことにした。これはのちに「伍豪（周恩來の變名）ら二四三人が共黨を離脱する啓事（公告、聲明）」の記事となつて新聞に掲載されることになる。潘漢年が國民黨の誰にどのような話しを持ちかけたのかはもちろん分からない。だが、このノウレンス事件は、たしかにこの後に發生する周恩來にかかわる事件に連動していつたのである。

4 波紋Ⅲ — 伍豪啓事事件

上海の各新聞に掲載された「伍豪啓事」の文章は、先の黃凱が獄中で、張冲が自ら筆を執つて伍豪啓事を書き、中外の各大新聞に一週間登載したとはじめて「真相」を自供していた^⑨。黃凱は出獄後、また尤らしく記事掲載の経緯を語つたが、「伍豪啓事」は張冲が書いたと證言するのは黃凱だけで、それも反革命罪で逮捕され、訊問中の自白であつた。

黃凱は五三年の後、刑期を終えて釋放された。三十年から三三年にかけて共產黨員を何十人も殺害したという反革命の重罪人があの苛酷な反革命鎮壓運動の最中に、わずか三、四年の刑期で釋放されたというのはとうてい考えられないことであるが、のちに國民黨特務時代を回想した「我的特工生涯と所見所聞」を書いた。その中で「伍豪啓事」が新聞に掲載された経緯を述べている。穆欣は黃凱の回想文を以下のように引用している。

「張冲が來滬して葬儀を取り仕切つた。事後、私とCP（コミュニニスト・パーティー）の經濟困難を語り、おそらく多くの黨員は動搖しているだろうから、ために周恩來の化名、伍豪を用いて本物に見せかけた脱黨公告を新聞に掲載して見ようということになつた。張が（伍豪ら共産黨を離脱する啓事）を起草し、私がこれを人に上海の各新聞社に持つて行かせ

て掲載した。ところが何の反応もなく、何時までたつても各機關にこっそり自首してくる者はいなかった。相反して《申報》に大辨護士が伍豪に代わって聲明を發表した。季源溥は《申報》の史量才に掲載すべきでないと警告したが、史は敢然と拒否して、廣告は營業の性質であり、まして法律の觀點から見れば、伍という姓を無斷で使われたのだから、とうぜん聲明すべきである」といった。^②ところが、もしこの話がこの通りとするならば、穆欣の引用には巧妙なトリックがある。

周恩来らの共党離脱廣告 申報 民国、21・2・20

伍豪等脫離共黨啓事

汪精衛友社社評部于此時務主彈劾汪逆致謝書張承中勸海次迎逆致謝書陳在希、公啓

穆欣が引用した黄凱のこの文章の前段にはこのような文章があるのだ。黄凱が「葬儀の後」といったのは、一九三二年の夏のことであった。すなわち、黄凱はこの年の夏、徐恩會、顧建中にもなつて南京で開かれた中統系の幹部會議に出席する。この會議で徐恩會の中統と戴笠の軍統が特務工作の功績を争つて對立し、中統の内部腐敗が非難された。黄凱はここで戴笠に取り入つて重寶されている顧順章に不信をいだいた。會議後、黄凱は上海に歸り、軍統に對抗する上海工作團を作る準備をした。上海に歸つて數日後、團員の王斌、曹清澄、陸元虎が何者かに殺害される事件が起こり、工作團の團員はみな葬儀委員となつて葬儀をすませた。^②したがつて黄凱が葬儀の後、といった話は一九三二年の夏以降の事ではなければならない。じつさい、「伍豪啓事」が新聞に掲載されるのは三年二月十六日の《時報》にはじめて掲載されてからであり、《申報》は二月二十日にこの公告を掲載した。いずれにせよ、張冲と黄凱がいうような相談があつたとするなら、二月十六日以前のことではなければならず、

周恩来の誤算

穆欣は前後の文章を故意(?)に無視して「伍豪啓事」は張冲と黄凱の偽造であると捏造したのだつた。したがつて、「伍豪啓事」に關する黄凱の證言はまったく信頼できないことになる。

黄凱は逮捕されて、南京市公安局長陳養山の取調べを受けたとき、「君たちが一九三二年二月に『伍豪脱黨啓事』を偽造して上海の各新聞に廣めたのはどういふ事だつたんだ」と誘導尋問され、上記のような話にするので罪を免れることになつたのであろう。後に回想文を書く段になつて中共當局の意圖をすっかり忘れてしまい、陳養山と合作の作り話を無造作に書いてしまつたのである。しかし黨史では、黄凱の「證言」を「伍豪啓事」が國民黨の捏造による陰謀であつたという動かぬ證據にした。

周恩来の代辨人、穆欣は陳養山の手腕を稱え、「文革」の時期、「四人組」は「伍豪啓事」を借りて周恩来同志を罪に陥れた。養山同志が審問して得た黄凱の供述はたしかに周恩来同志が潔白である有力な證據であつた」と述べる。^③

じつさい、「伍豪啓事」は問題が起こつてからずっと周恩来の政治的立場を窮地に陥れた。それは自ら蒔いた種から起こつたものだったが、死に至る間際まで彼を苦しめる禍根となつたのである。

伍豪ら二四三人は共產黨を離脱する

一九三二年二月十六日から上海の各紙に上記のような奇妙な公告が載つた。公告の内容も一般の人々にはほとんど分からなかつたであろう。公告はこういう内容だつた。^④

敵^{わたくし}人らは深く、中國共產黨が目前取つてゐる手段、いわゆる紅軍を發

(十一月二十二日)、佛租界姚主教路愛棠村に埋められていた遺體が発見され、そのあとも、租界の各地で十三體の遺體が掘り出された(愛棠村事件)。それが共産黨の仕業だと新聞に報じられると(申報はこの月の二十三日から二十八日まで毎日報じた)、一時、上海市民を震撼させる大騒動となった。《申報》、十一月二十四日附の「本埠新聞」は次のような見出しで愛棠村事件を報じた。

共黨の建將投誠後

全家慘(むざん)な殺戮に遭う

姚主教路屍身之由來

▲顧順章中央に投誠した後

▲共黨内部に容れざる所と為し

▲愛棠村遂に此の慘變あり

▲前後共に十一人を殺死する

殺害の實行に及んだのは、周恩來に命じられた特科第三科の紅隊(打狗隊)であった。紅隊の隊長をしていた王德生が逮捕され、第三科の康生が指揮したと自供した。

蔡孟堅は、前出の回想録の中でこの事件を大きく取り上げたが、搜索の陣頭をとったのは顧建中、特務の張冲の名前を擧げていない。中共側の文献では、ほとんど四月二十八日の大搜索は張冲が指揮をとったとしている。この搜索が空振りに終わったので、張冲は新しい部署を作つて周恩來を目的にした。九月の初め、政府の名で新聞に周恩來らの逮捕に懸賞金を懸けた公告を出し、十一月二十九日、顧順章も個人名義で周恩來の逮捕に懸賞金を懸けた。だが、これらの計略がすべて失敗したので、張冲は黄凱と共謀して「伍豪らの離黨聲明」をでっち上げたのだ

周恩來の誤算

と説明する。張冲、黄凱共謀説である。

蔡孟堅はこう述べる。(四月二十八日)國民黨の中央が派遣した辨案人員(事件處理員)、顧建中總幹事が顧順章を率いて上海に乗り込み、上海市公安局と英佛の捕房と連携して大搜索を行なった。しかし中共の各機關や指導者の住まいはどこもぬけの殻であつた。そこで顧順章は妻や家族と連絡をとろうとしたが、ここもみな失踪していた。のちに、租界の捕房と合同で妻の弟、張長庚と特科第三科長の王竹友(王德生)を捕まえ、何日もかけて説得したところ、顧の一家十三人は周恩來が王竹友を率い、自ら手を下して毒殺したと白状した。ここには、顧順章が搜索の主役であつて、張冲や黄凱の陰謀の話は出てこない。それもそのはずで、國民黨にとつては「伍豪啓事」が國民黨の偽造文書であるというのはまったくの寝耳に水で、だから當初から何の反論もしなかつた。

一方、中共臨時中央は二月二十日、上海の黨機關紙《鬭争》に、「伍豪啓事」が國民黨の陰謀であると聲明し、また二月の末、江西の中央ソ區で毛澤東が臨時中央政府主席の名義で布告を出して、周恩來はすでに中

三六七

中華民國二十二年十一月二十四日

●共黨健將投誠後

本埠新聞

全家慘遭殺戮

姚主教路屍身之由來

▲顧順章投誠中央後

▲爲共黨内部所不容

▲愛棠村遂有此慘變

▲前後共殺死十一人

修德里亦有藏屍

自前日法租界姚主教路愛棠村三十三及三十七兩號院中、發現大批被入謀殺之男女屍身後、轟傳全埠、均囑爲空前罕觀之慘案、惟當時傳說紛紜、悉以爲定係匪徒架付肉票、因未備價贖、致遭擄殺之禍、而聞神屍滅跡、並稱近因漢口破獲捕房、請其就地查勘云云、當時記者對於此種傳說、即抱非常疑慮、會以爲既屍擄票、此大批肉票、究屬何處那來、而擄匪又何在漢破獲、若謂肉票係自漢架擄者、則數千里之隔、乘輪轉運四五日之久、沿途軍警密佈、匪即遁息、亦絕不出此、况匪之架票、目的不過金錢、即屬絕不獲已、倘然擄票、爲數亦絕不致成批、此事實之最明顯者、記者當時即疑本案中或含有政治作用、及其他特殊情形、至昨日將屍身掘出發殮時、果有人前直認領、所有屍身、乃係一家骨肉、是案起因、因系死者家人之一、爲共產黨重要份子、嗣後確據、在漢向郭主席何成勝自首、最後又經蔣主席召之入京、界以要職、其籌濟共之策、因此遭共產黨人之怒、出此毒案、將其閭家所有人等一齊謀斃、即備僕從屍、無一倖免、亦云慘矣、今將經過詳情、詳錄於左、

愛棠村事件を報じる記事 申報 民国20、11、24

央ソ區に到着して、啓事など書けるはずはないと述べて、國民黨の「造謠汚蔑」を非難した。しかし、この時の毛澤東の黨内地位は後年のような絶對的なものではなかった。むしろ中央ソビエト區ではまったく孤立した存在であったのである。ちなみに、最近出版された毛澤東の赤裸々な人間像を描いたユン・チャンの『マオ——誰も知らなかった毛澤東』では、「伍豪啓事」は毛澤東が周恩来を陥れるために情報操作した可能性があると指摘している。ユン・チャンはさらに後段の記述で、文革期にこの問題が毛沢東によって取り上げられ、周恩来がいかに恐怖心を懐いたかを次のように述べている。「一九三二年に周恩来が毛沢東に代わって瑞金の中華ソビエト共和国の党ナンバー一になった直後、上海の新聞に『伍豪等脱離共党啓事』という不可解な記事が掲載され、転向宣言を書いた人物（伍豪）は共産党を非難して党と絶縁しようとしている、と報じられたことがあった。周恩来はこの中傷記事に震えあがり、とくにこの記事を仕掛けたのが毛沢東かもしれないと考えおびえ、毛沢東の足下に屈した。それ以来、毛沢東はこの一件を強力な威しの道具として使ってきた。三〇年以上のちに文化大革命が始まったとき、毛沢東は一度、この脅しを周恩来の頭上にぶら下げたことがあった。」ユン・チャンの指摘は、事件の表面だけを追って見ると一見、不可能なことに思えるが、しかし実際に重要な事実を示唆している。まず、臨時中央政府主席、毛沢東が出した国民党非難の布告は、毛の名義を勝手に使った周恩来のアリバイ工作であったこと、周はすでに上海を離れていたから公告を出せるはずがないと言う解釈は、「公告」と無関係であった証拠にはならない。しかし、毛沢東は確かにこの事件で犯した周恩来の致命的な誤謬を掴んでいた。だから周恩来は事件の真相が明るみに出るのを恐れ、あらゆる手段を使って隠蔽に躍起となった。

黨臨時中央は、これらの聲明は効果がないと分かると、方針を変えて

合法的な方法で反論することにした。この任務を潘漢年に託した。陳雲、康生ははじめからこの問題にかかわりたくなかったのではないか。陳雲は後年（一九八三年）、この事に言及し、特科工作は私に代わって康生が責任者になり、康生は國民黨の偽造を暴く任務を潘漢年に任せたといい、また、このとき、特科の任務は實際上、潘漢年が責任を負っていたと述べる^⑧。康生がこの問題から避けようとしたのは、おそらく何らかの事実を知っていたからであろう。「文化大革命」のとき、康生は南開大學の紅衛兵に伍豪啓事の内容を知らせ、江青に周恩来への攻撃を使喚する。康生は「伍豪啓事」問題に關しては何も言わずに死んだが、真相の鍵を握る人物であったのは間違いないであろう。

一方、事件の解決を一任された潘漢年は公告が偽造である證據を明らかにすることに意を注いだ。もと出版屋の番頭の發想らしく、潘漢年は伍豪の名で逆に公告を出して、別に本物の伍豪がいることを證明しようとした。潘漢年に依頼された《申報》社はこのような公告を載せた。

「伍豪先生鑒 本月十八日に承った送來の公告一件は福昌床公司が擔保を否認しましたので、手續きが合わず、未だ刊出しておりません」伍豪が送ってきた公告は掲載の擔保が不充分なので、まだ掲載に至っていないという新聞社の通知公告である。つまり、先の「伍豪ら二百四十三人は共産を離脱する啓事」は別人の伍豪であると強調したのである。こんな回りくどい釋明は誰も納得してくれなかった。潘漢年はそこで、周恩来の別名、周長山の名義で抗議聲明を出すことにし、上海の著名な辨護士、陳志皐に依頼した。陳志皐は外國の辨護士の方がよいと助言し、フランス人のバホ（巴和）を紹介した。潘漢年がバホ辨護士を探し得たのは部下の女工作員、黃慕慧の仲介があったからであった。黃慕慧は上海の社交界に出入りし、國民黨の幹部の連中とも顔見知りが多かった。黄はこのとき、張冲に頼んでバホ辨護士に接觸したともいう。こうして三

二年三月四日の《申報》に、「巴和律師の周少山に代^{かわり}表^{ひょうめい}する緊要啓事」が載った。

後年、このときの経緯をつぶさに見ていた李一氓は、この啓事には百兩の銀子を使って少し高くついたが、われわれの目的は達成したと語った。

中共の党史を代辨する穆欣は、この公告が掲載されると、「伍豪啓事」の真相が天下に明らかになり、國民黨のデマを流して中傷する陰謀は徹底的に失敗し、黨はこの戦いで決定的な勝利を得たと、まるで黨校の講義のような見え透いた説明をした。しかし、どんなに周恩来に肩入れする人でも、これですっかり真相が解明されたとは思わなかった。穆欣は「伍豪啓事」が國民黨の組織的な陰謀であったという前提に立つて述べているが、そもそも「伍豪啓事」を書いたのは張冲で、部下の黄凱が新聞社に人を使って持ち込んだと言うのは、ずっと後の一九五三年、黄凱の自供にもとづいて穆欣自身が言い出したことであつた。黄凱の自供に矛盾があることはすでに述べた。

ではいったい誰が、何のためにこのような公告を新聞に出したのであろうか。以上の推移からはまだはつきりしない。ただ、顧順章事件以来、つぎつぎと発生する事件が周恩来の「誤算」に起因していたことは、これまで縷縷と述べてきたことによつてもはや明らかである。では、その周恩来の「誤算」とは何であつたのか。筆者はそれを顧順章の「叛變」事件にあつたと推測する。ここで顧順章「叛變」事件の真相を考察するまえに、もう一度、「伍豪啓事」が掲載された背景を振り返つておこう。

注

① 周恩来の特務活動を最初に體系的に考察したのはジャーナリストの穆欣であつた。穆欣は一九三七年に革命に参加して以来、軍關係の機關紙の編集、記者を歴任し、共産中國成立後は中共中央黨校新聞教研室主任、国防戰士報社、新華社雲南支社社長、光明日報黨組書記兼總編輯などを

周恩來の誤算

歴任した言論報道界の幹部である。穆欣は、はやくも一九八〇年に周恩來の特務活動を書いて黨の公式見解の規準を作つた（周恩来同志領導的一場驚心動魄的鬭爭）《人物》一九八〇年第四期）。その後、關連資料を網羅して著わした『隱蔽戰線統帥周恩來』（中國青年出版社、二〇〇二年一月）は、中共特務機關の全容を體系的に捉えた黨史の規準となり、同じ問題をあつかつた著作はほとんどこの書を底本とした。しかし、『隱蔽戰線統帥周恩來』の記述はまず黨の基本的な立場が先にあつて、事實をそれに合わせるという敘述手法である。したがつて、この書はあくまで政治的な文献であつて、眞實を追究する研究書ではないことを留意しなければならぬ。

② ここでいう黨史とは、中共の公式見解にもとづいて書かれた著書、文章のことをいう。言論を統制する中共は黨文件、黨員に關する著述に對して審査したうえ刊行を許可した。また、マスメディアに對する黨の公式見解は「通稿」といつた。河清漣によれば、中國政府はマスメディアを統制しているため、政府が重大問題と見なすニュース報道については、一般に中央政府が新華社名義でニュース原稿を發表し、これを通稿と呼んだという（河清漣『中國の嘘』扶桑社三五〇三六頁）。

③ 最初に顧順章事件の要因を説いたのは、楊子華（瞿秋白の妻）であつた。楊子華は三八年にモスクワで杜寧の筆名で「叛徒顧順章叛變の經過と經驗」（後に《黨的文獻》一九九一年、第三期に掲載された）をかき、顧順章が「流氓無產階級」出身であつたことが事件を引き起こした大きな原因であつたと指摘した。この時期に楊子華がなぜモスクワでこのような論文をかいたのか不明であるが、このとき、顧順章事件をどうして個人的原因で起きたことにしなければならない要求があつたのであろう。この楊子華説が以後の顧順章事件の性格を決定することになった。周恩来は後年、一九五〇年五月、ある會議の席で顧順章問題について語り、「顧順章の叛變は、偶然なものではなく、當時の立三路線と四中全會はみな彼の動搖を深めたが、我々は前もつて警戒しなかつた」と述べる。周恩来は、顧順章の裏切りの背景に李立三路線の敗北と王明の權力掌握があつたとし、事件の重大性を指摘したように見えたが、しかし、結局は「教育を強化すべきであつた」顧順章の人間性に問題を縮小した。楊

子華が事件の性質を決定してから、立場の違いを超えて總動員による顧順章にたいする個人批判が始まる。逆にいえば、周恩来が如何に顧順章事件の真相が暴露されるのを恐れたかを物語っていた。

④ 陳養山「關於中央特科」《黨史資料雙刊》一九八一年、第二輯。なお向忠發については、穆欣『隱蔽戰線統帥周恩來』三七四頁、王光遠『浦江魂—白色恐怖下的周恩來』（中央文獻出版社、一九九九年）二〇二〜二〇七頁、ディック・ウイルソン『周恩來傳』（漢譯、解放軍出版社、一九八九年）などを参照。

⑤ 陳琮英「我所知道的向忠發被捕與叛變」《黨史資料雙刊》一九八〇年、第二輯、及高軍整理「關於向忠發被捕叛變問題」《黨史研究》一九八〇年第四期

⑥ 潘漢年の特務工作、及び晩年の悲劇については、劉人壽・何肇「記潘漢年對敵隱蔽鬥爭工作斷片」『潘漢年在上海』（上海人民出版社、一九九五年）所收、及び陳修良『潘漢年非凡的一生』（上海社會科學院出版社、一九八九年）、張雲『潘漢年伝』（上海人民出版社、二〇〇六年）を参照。

⑦ 陳琮英前掲論文

⑧ 蔡孟堅「兩個可能改寫中國近代歷史的故事」《傳記文學》三七—五、一九八〇年十一月、いま、蔡孟堅『蔡孟堅傳真集』傳記文學出版社、中華民國七十年（一九八一年）六月に収録する。

⑨ 中國現代史辭典編輯委員會編『中國現代史辭典—人物部分』近代中國出版社、民國七十四年（一九八五年）、六一—九頁

⑩ ⑧と同じ

⑪ ノウレンス事件については、『申報』一九三一年六月十八日付けの記事に逮捕時の状況を掲載し、ノウレンス夫婦の顔寫眞を載せる。事件の全容は、陳漱渝『中國民權保障同盟』（北京出版社、一九八五年）第二章、三一〜三六頁に詳しい。

⑫ 宋慶齡らの『活動』については、中国社会科学院近代史研究所・中華民国史研究室主編『中國民權保障同盟』（中国社会科学院出版社、一九七九年）、四三〜五五頁。及び、イスラエル・エプシュタイン『宋慶齡』（サイマル出版、一九九五年）三六〇〜三六四頁

⑬ 『潘漢年在上海』上海人民出版社、一九九五年、四三—九頁

⑭ リヒアルト・ゾルゲ『ゾルゲ事件 獄中手記』岩波書店、一四九〜一五〇頁

⑮ 『紀念陳養山文集』所收、いま穆欣『隱蔽戰線統帥周恩來』五一二〜五二三頁から轉引

⑯ 江蘇文史資料編輯部『中統特工秘錄』（江蘇文史資料第四五輯）江蘇文史資料編集部發行、一九九一年、十二頁。

⑰ 『申報』は、民國二十年九月八日から押収した文書の翻訳を掲載した。

⑱ J・O・Pブランドによれば、ノウレンスの逮捕によって、一九三〇年十月から一九三一年七月までの間にコミンテルンは中國での宣傳工作活動のために九〇〇萬メキシコドルを支出していたことが明らかになったという（『中國—この悲劇的なる國』、いま、K・カール・カワカミ『シナ大陸の真相 1931—1938』展轉社、五五〜五七頁より轉引）。

⑲ 陳雲は後年の一九八三年一月二十三日、潘漢年を記念する座談会で、上海の黨組織（特科）がほとんどの任務を潘漢年に託したことについてこう語っている。「當時、私は上海臨時中央にいたが、しかし、すでに特科を離れて全總に行つて黨團書記になつていた。だから、新聞に『伍豪啓事』が掲載されたとき、恩來同志はすでに中央ソ區にいて、この啓事は敵の陰謀であることを知つていただけであつた。私は當地の黨がどのような方法で國民黨のこの陰謀の状況を暴いたのか理解していない。そのとき、私に引き繼いで特科工作の責任を負つたのは康生で、彼の話しによれば、國民黨が偽造した『伍豪啓事』を暴く任務は、そのとき潘漢年にやつてもらつた。（『潘漢年在上海』四四—頁）陳雲のこの話しは、一九三二年三月の頃のことと、じつは陳雲、康生の二人は特科の工作にまつた關與していなかつたのである。二人が改組された特科に加わつたのはおそらく王明の意向であつたろう。人脈から言えば、二人は王明と密接な關係があり、二人は特科の工作に對して當初からまつたく働く氣持がなかつた。このことは、一連の事件の背景を考えるうえで重要な事柄となる。

⑳ 「伍豪啓事」が國民黨の捏造記事だと最初に言及したのは康生であつた。康生は顧順章が書いたものと直感したのだが、當時のほとんどの人も顧順章の文章だと連想した。國民黨の李昂も一九四一年に、當時の事

件を振り返って、その著『紅色舞臺』にこのように書いた。「顧順章は××の名字を捏造して、上海の《申報》に××等×××十人が中國共產黨を脱離する啓事」を登載したが、この数字は、私ははつきり覚えていないので、×の符號に代えなければならぬ。……××××が脱黨した、このニュースは吳淞口外から吹いてきた臺風のように、上海の黨内に數日の間、吹き荒れた。しばらくして、黨内でこの啓事は偽造されたものであることが證明された。……我々は、顧順章先生のこの方法は決して中共を打倒できず、×××に對しても少しも害を與えないことを指摘しなければならぬ（おそらく彼はこのことについてそう有名になつたであろう―原注）」（いま、王光遠『浦江―白色恐怖下の周恩來』二二〇頁より轉引）。しかし、顧順章偽造説はいつの間にか消え去り、中共黨史の見解として、國民黨の特務、張冲が捏造したことになつた。この「事實」を摘發したのは、一九五〇年九月、當時、南京市公安局長であつた陳養山が反革命罪で逮捕していた國民黨特務、黃凱から聞き出したものであつた。陳養山の傍らで黃凱との訊問を聞いていた政治保衛處予審科科長、秦傑はのちに陳養山を回想した中に黃凱の自供内容を書いた。穆欣は、この秦傑の文章と黃凱が釋放後に書いた回想録をもとに張冲捏造説を作り上げた。これが黨の公式の見解となり、周恩來の死後、鄧穎超はあたかもこれが「伍豪啓事」の真相であるかのように主治醫の張佐良に語つた。

（張佐良『周恩來・最後の十年―ある主治醫の回想録』邦譯、日本經濟新聞社、一九九九年、二六二―二六三頁）

②① 穆欣『隱蔽戰線總帥周恩來』五一―二頁

②② 黃凱「我的特工生涯和所見所聞」（江蘇文史資料編輯部編『中統特工祕錄』《江蘇文史資料》第四五輯所收、江蘇文史資料編輯部出版發行、一九

九一年九月）七頁

②③ 穆欣前出書、五一―三頁

②④ この記事は、最初、二月十六、十七日の《時報早晨號外》に掲載され、十八日に《新聞報》、二十日、二十一日に《申報》に掲載された。この日、《時事新報》もこの記事を載せた。

②⑤ 鄭先海「董健吾漢口脫險記」縱橫編輯部編『隱蔽戰線大寫真』中國文史出版社、二〇〇一年所收

②⑥ 穆欣前掲書、四四四頁、及び王光遠『浦江魂―白色恐怖下の周恩來』中央文獻出版社、一九九〇年所收

②⑦ 金瑞英主編『鄧穎超一代偉大的女性』山西人民出版社、一九八九年、一七頁

②⑧ 蔡孟堅前出論文、王世徳は《申報》に「共產黨離脱聲明」（一九三二年一月十一日附記事）を掲載し、先月、報道された上海の死體發掘事件を密告した人物は、じつは自分であり、共黨の首領周恩來、趙容（康生）らがやったもので、自分も死體を埋めた一人であると告白した。

②⑨ ユン・チャン、ジョン・ハリデイ『マオ―誰も知らなかつた毛澤東』（邦譯、講談社、二〇〇五年、上、一九八―二〇〇頁及び下、四四七―四四八頁）

③① 『潘漢年在上海』四四―一頁

③② 李一氓『模糊的熒屏』、いま『潘漢年在上海』五一―八頁より轉引

③③ 『隱蔽戰線總帥周恩來』五一―九頁

（未完）

（本學文學部教授）